



* ノーマライゼーションを体感！

「絆プロジェクト」障がい者施設との交流活動

やまびこだより No.128 (2013年度)より

アトリエ CoCo の皆さんと2年間にわたって交流をしました。



障がいのある人に怖れや先入観もあった子どもたち。学校の近くにある施設で働く人たちと出会いました。障がいがあっても、仕事熱心で、明るくて、優しく、一緒にいるととても楽しい人たち。「みんな友達になる」って、わくわくするね。



アトリエ CoCo との交流活動「絆プロジェクト」

ある日、長野市立保科小学校の5学年を受け持つ篠原先生は、子どもたちが友達に、「障がい者」を表す差別的な言葉を使うのを聞きました。それは友達を罵る言葉だ、と子どもたちは言いました。先生はショックを受けました。

学級で話し合うことで子どもたちはすぐに反省したと言ったけれど、本当に心で受け止めてもらえたのだろうか、障がいのある人を心で理解し、共に生きていける人になってほしいのだけど……。

そんな思いを抱えた先生は、学区内に障がい者の施設「アトリエ CoCo」があることに気づきます。さっそく施設長の綿貫好子さんに相談。真夏の暑い日、子どもたちは施設見学に行きました。「障がいのある人は、どんな人だろう」。そう思いながらの訪問でした。

皆さんの仕事は高温の中でのクリーニング作業や、野菜の出荷。暑い中での重労働に、一生懸命取り組んでいました。「障がい者は何もできないから、仕事も簡単」と思っていた子どもたちの

先入観が吹き飛びました。CoCo の皆さんは初めて会ったのに、笑顔で迎えてくれました。「障がいがあっても、できることを頑張っていて、私よりずっとすごい」「帰るとき、見えなくなるまで手を振ってくれたよ」……子どもたちは驚き、感動し、もっとその人たちのことを知りたくなりました。こうして、交流活動「絆プロジェクト」が始まりました。

みんな一緒に生きている、それが「ノーマライゼーション」

交流では一緒にものを作り、ゲームをしました。教えたり、教えられたり、協力して何かをしたりする、双方向の交流です。

歌を歌うと、一緒に歌い踊って嬉しい気持ちを全身で表現する CoCo の皆さん。初めは驚きましたが、まっすぐに気持ちを伝えてくれるので、みんな嬉しくなってノリノリ。ゲームをすれば、勝っても負けてもみんなハイタッチ！回を重ねるごとに、子どもたちは、どうしたら一緒に楽しめるか調べ、工夫して企画するようになりました。

耳の不自由な人には、覚えてたの手話でこちかく話しかけました。新築された体育館に招待し、手作りのおやつでもてなしました。CoCo の皆さんは、子どもたちと共に過ごす時間を心から楽しんでくれました。

「絆プロジェクト」は、子どもたちが卒業するまで続きました。6年生の3月。最後の交流会では、CoCo の皆さんが、この日のための特別な替え歌を歌ってくれました。思い出の写真と一緒に葉を作り、アトリエ CoCo からの感謝状をいただきました。「この交流がなかったら、私はずっと障がいのある人を避けていたと思います。でも、皆さんに会って、みんな普通の人と同じなんだと思いました」「これで最後だと思うと、さみしい……」。

綿貫さんは、「ノーマライゼーション」という言葉を教えてくれました。「どんな人でも、地域で普通の生活をしていくこと」、つまり「みんな友達」ということ。アトリエ CoCo の皆さんを、子どもたちは友達として、心から尊敬しています。それが「ノーマライゼーション」なのです。



ノーマライゼーション=みんな友達と知る

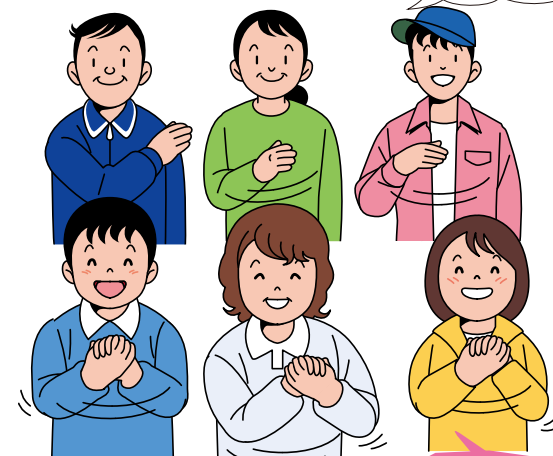


障がいがあるってどんなこと？

身体や脳が、他の多くの人と同じように機能しないために起こる「暮らしにくさ」のことを「障がい」と呼びます。でも、その「暮らしにくさ」は、地域の中で楽にすることもできるのです。

障がいがあっても、なくても、みんな友達になれる！

みんな！



友達！

聞こえない人からは手話も教えてもらいました！

「障がいがある人の施設との交流」活動のポイント

①まずは、いいとこさがし

保科小学校とアトリエ CoCo の交流では、第1回目は必ず皆さんの働いている様子を見学に行きます。何にもできない人だと思っていたのに、大変な仕事を一生懸命やっているということに、子どもたちは驚き、感動します。この感動が、「もっと知りたい！会いたい！」という思いにつながっていききました。

②時間をかけて、顔の見える関係づくり

時間をかけて、一人ひとりの顔が見える交流になっていることもポイントです。一人の人として出会うことで、お互いの魅力や障がいのことをよく知っていくことができます。「偏見」は相手を知らないことから生まれてくるのです。身近なところで、日常的な出合いを重ねていくことで、同じ地域に暮らす仲間同士という意識、顔の見える関係が育っていきます。

③一方的に与えるのではなく、双方向の交流

子どもたちはどうしたら一緒に楽しめるかを調べ、工夫して企画を考えました。回を重ねるごとに、自分たちを気づてくれる CoCo の人たちの姿から学ぶこともたくさんあると気づきました。どちらか一方が与えるのではなく、お互いにいい時間を共有することで、自分たちにとって大切な友だちと思える連帯感が芽生えました。綿貫さんいわく、「案ずるより産むが易し」ですよ。

プロセス

※篠原賢朗先生がまとめた「アトリエ CoCo のみなさんと、保科小学校6年生の「絆」プロジェクト」～2010年7月～2012年3月までの活動報告～をもとに構成



参考文献「認識の三段階」増補版 庄司和晃著 季節社刊

ねらい くふう 取り組みへの思い

誰もが持つ「素晴らしさ」に気づく子どもに

長野市立保科小学校 篠原賢朗先生

子どもたちから、障がいがある人を蔑視するような言葉を聞いた時はショックでした。けれど、ただそういう言葉を使わない、と約束するだけでなく、子どもたちの中に芽生え始めた、差別の気持ちを根絶やしに出来ないかと考えたんです。

障がいがある人への差別や偏見を持たないでほしい。障がいがあるから何もできないのではなく、それぞれの素晴らしいものがあると気づいてほしい。周りの友だち、学校全体、身の周りのすべての人をそんな気持ちで考えられる子どもになってほしいというのが、大きなねらいです。

障がいがある人のことを考えながら接することができる子どもは、いろいろな友だちも理解して接することができるのではないのでしょうか。

♡♡♡

1回目は仕事の見学に行き、一生懸命働く姿をまず見ることから始めます。子どもたちは、大きな乾燥機の前で汗だくになって熱の塊みたいな洗濯物を出している様子

子どもの時にこういう経験がなかったので、障がいがある人たちは特別な人たちだと思っていました。私も毎回子どもと一緒に感動しながら勉強しています。前の夜は興奮で眠れないくらい、楽しみにしています。

を見て驚き、一生懸命な姿に感動し、皆さんがとても優しいことに喜びを感じて、感動して帰ってきます。

毎回、こちらから何かを与えるばかりでなくて、CoCo の皆さんも子どもたちを盛り上げてくれるという、双方向のやり取りがあります。

交流会の企画は子どもたちが考えました。「CoCo の皆さんのことを、よく思い出して。一緒に楽しめるものにしよう」と、一人ひとりのことを思いやり、工夫をします。聞こえない人と話すために、手話も練習しました。そういう準備も毎回楽しみなんです。

交流の後には、全員の感想文を学級通信に載せます。家の人にも読んでいただけるようにしました。大人たちも、これを読んで障がいがある人に対する意識が変わってほしいと思っています。6年生の児童が、「CoCo との交流がなかったら、きっと私は障がいがある人たちをずっと避けていたと思います」という作文を書いてくれました。本当にこれをやって良かったと思いました。

こんなに多くのことを学ばせてくれる「教材」が近くにある。利用しない手はないと思います。

2011年5月 小学校にご招待 学校でお楽しみ交流会

- 6年生による歌
- 劇「保科小学校って楽しいところだね」
- お互いに自己紹介
- ゲーム
①「猛獣狩りへ行こう」
②「フライングディスクを楽しもう」
- 綿貫さんのお話

交流会のための歌や劇のリハーサル、改善点の話し合いを繰り返しました。

「劇、楽しかったよ」とか、「ありがとう」と何度も声をかけてくれて、うれしかったです。



2011年11月 心の学習発表会 絆が深まる4回目の交流会

- 6年生による歌
- 劇「おかしな雪だるま」
- ゲーム「フライングディスク」
チームに分かれて競争
- おやつ時間
6年生が作ったスイートポテト
- 綿貫さんのお話
「絆」プロジェクトと命名



2012年3月 最後の交流会

私はアトリエ CoCo のみなさんが大好きです！

「ノーマライゼーション」とは何か 障がいがある人への理解 認識の深まり

学校と、障がいがある人が働く施設。「お互いを知りたい」という思いが会って、絆が結ばれました。子どもたちも大人もいっぱい感動し、たくさん学び、大きく成長した「絆」プロジェクト。

「ノーマライゼーション」とは何かを体感して！

「地域で普通に暮らす」ってなんだろう？

1990年代以降、「障がいがある人も地域で普通の暮らしをする」ノーマライゼーションの考え方が福祉施策の中に盛り込まれてきました。そのことにより、かつては「障がいがある人は専門の施設で暮らす方が良い」とされ、ずっと施設の中で暮らしていた人々が、様々な制度やサービスを利用して地域で暮らせるようになってきました。今の大人たちが子どもだった頃と比べて、地域で障がいがある人に出会う機会が増えているのには、こうした背景があります。

アトリエ CoCo のような地域で働く施設、普通の家のような建物で共同生活を行うグループホームなどの他、一般の企業で働いたり、アパートや公営住宅で自立して暮らしている人も、結婚して家庭を築く人もいます。

障がいがあるということは、日常生活の中で、ある一部分について「暮らしにくさ」を感じることもある、という状態です。障がいがある人も私たちがそうしたいと思うように、住み慣れた地域で、いろいろな人と関わりながら、自分の力を活かして、自律的な生活をするを願っています。それは当たり前の権利で、誰にでも保障されています。

障がいがある人は特別な人ではありません。一人ひとりが当たり前の、私自身と同じようにかげがえのない個性を持つ一人の人だということを心に留めておくことが大切です。

三つのお願い

障がいがある人が地域の中で一緒に生活するのは当たり前。電車と一緒に乗るのも、一緒に働くのも当たり前。みんな、地域の中で普通に生活したいのです。だから、

- 一つ、悪口を言わないでね。
- 二つ、差別は絶対しないでね。
- 三つ、いじめを絶対してはいけないよ。

みんな仲間で、一人ひとり誰にでもいいところがあります。赤ちゃん、お年寄り、障がいがある人も、外国の人も、み～んな友だち、同じ人間なのですから。

社会福祉法人廣望会 アトリエ CoCo

(長野市若穂保科)

多機能型障害福祉サービス事業所。知的に障がいがある人がそれぞれの特性に合わせて、クリーニング、農作業、軽作業を行っています。自分の家やグループホームから通い、工賃(給料)を稼いで、それを小遣いや生活費にして、自立して普通に地域社会の中で生活しています。

<http://www12.ocn.ne.jp/coco-net/>



綿貫好子さん

社会福祉法人廣望会
アトリエ CoCo 施設長



やまびこだより No.135 (2014年度)より

* 違いを越えて伝え合う

視覚障がいがある人と美術館に……

視覚障がいがある人と美術館に……
見えない人がどうやって見るの？

東御市梅野記念絵画館で
ボランティアを体験しました。



障がいがある人は、大変。ものすごく苦労していてかわいそう。「障がい疑似体験」ではそんな感想がよく聞かれます。けれども、本当にそうでしょうか。障がいがある人は助けを待つばかりの人ではありません。そのことに気づき、「してあげる⇒助けてもらう」だけでない、対等な関係を作るための豊かな出会いを紹介します。



見えない人が美術館に？

11月の日曜日、上小地域障害者自立生活支援センター主催による「エンジョイライフサロン」が、東御市の梅野記念絵画館で開催されました。この日は視覚障がいがある人たちが多く参加し、美術館での休日を楽しみました。地元の北御牧中学校の6名の生徒がボランティアとして参加しました。

見えない人がどうやって絵を見るの？それがこの美術館で行っている「対話型鑑賞」です。静かにしなくてはいけないイメージの美術館ですが、今日はグループでおしゃべりをしながら絵を鑑賞します。

この絵の中では何が起きている？どんな雰囲気？美術館ボランティアの方に助けて頂きながら、ただ説明するだけでなく、自分が思うことを自由に語り合います。おしゃべりをしていると、自分

ひとりでは気づかなかったものが描かれていること、絵から受ける印象が人それぞれ違っているということに気づきます。自分が受け止めた絵の魅力を言葉で伝える方法も、それぞれ想像力をフル回転させて考えます。

色はどう説明したらいい？大きさは？雰囲気は？好きな絵であればあるほど、どう伝えるか悩んでしまいます。ここではどんな意見も正解。いろいろな感想やイメージが出てきます。

「私は目が見えなくなったことがないから、見えない人がどんなふうにイメージを描くのかかわからない。でも私はこの好きな絵のことを、自由に話せばいいんだと気づきました」と、美術部に所属する女子生徒は話していました。

違いを埋めていくのではなく、違う感覚を出し合うからこそ、物事を立体的に、深く感じられるということ、少しの工夫で、同じように楽しめることを知りました。

「見えない人だなんて意識しなかった」

この日は、陶芸体験も行いました。陶芸では、少しのサポートがあれば、見える人も見えない人も同じように作品を作れます。見えない人と一緒に作品を作った1年生の生徒たちは、どんな手助けが必要か、ひとつひとつその人に確認しながらのびのびと作品づくりを楽しんでいました。「一緒に作っているあいだ、相手が見えない人だと意識しなかった」と話していました。

障がいがある人は「かわいそうな人」ではありません。時にサポートが必要な人。そして「違い」はあっても、同じ時間を楽しめる仲間です。障がいの有無という「違い」をもつ人同士が、「アート」を通して違いを越え、違いを楽しみ、一緒に歩く。そんな体験をすることができました。

必要なのは、想像力と工夫、気持ちを言葉にする少しの勇気。



「対話型鑑賞」とは

「対話型鑑賞」は、1980年代にニューヨーク近代美術館で生まれた美術鑑賞の方法で、グループで作品について想像力を働かせながら話し合い、その対話を通して作品の理解を深めていくという方法です。グループでの対話を通して、作品の中にあるイメージを創り出す力、自分で考え、表現し、コミュニケーションする力などが養われます。県内では梅野記念絵画館のほか、信濃美術館（長野市）などでも対話型鑑賞によるガイドが行われています。

実際に体験してみると、誰かと「おしゃべり」をしながら見る作品には、一人で見るときよりずっと多くの発見があるということに気づきます。同じ作品が、これまでとはまるで違うもののように見えてくる瞬間があります。

グループの関係性の中であらわれる発見、別の見方、新たな感動というのが、この対話型鑑賞の楽しさです。

絵を見た後は、一緒に陶芸も楽しみました。



一緒に楽しみながら見えない人のことを知ることができていいですね。

一緒に見て歩いた方

広沢里枝子 さん

子どもの頃から少しずつ視力が落ち、26歳の頃に全盲に。現在はラジオパーソナリティ、長野大学講師、障害者自立生活支援センターのカウンセラーなどとして活躍されています。

「見える人」と「見えない人」のように、私たちは「違い」を持つ人と一緒に生きています。

●「違い」を越えて伝え合うためのポイント●

1 共通の目的を持って一緒に何かをしよう

一緒に何かをする。スポーツなどで仲間に。

2 相手のことを想像して、工夫しよう

どうしたらできるかな？ 伝わるかな？

3 間違いを恐れない

失敗したら、ごめんなさいとさえいいいのです。感じ方は人それぞれ。「正解」は一つじゃない。

* 高齢者にケータイ操作法を指南

地域授業「超ボランティア」の活動から

福祉教育実践ガイド 2012年度版より



超ボランティア班による携帯電話講座



フロアホッケー体験



スマイルボウリングで高齢者の方々と交流

北部高校には「地域」という授業があります。地域の産業や文化・歴史を学んだり、自分の進路を見つめるために、社会人講師の方々からお話を聞くなど学習内容は様々です。「生きた教材」におおいに触れて、豊かな感性を磨いています。

県内の高校では唯一の科目 体系化された「地域」の授業

飯綱町にある長野県北部高等学校では、県内の高校としては唯一「地域」という授業（以下、地域授業）を設けています。

地域授業では、地域の産業や文化、歴史を学んだり、自分の進路を見つめるために、ゲスト講師を呼んで話を聞いたり、内容は様々ですが、いずれも地域の方々に学びます。

1年次はクラスごとの体験学習を中心に、さらに2年次には自分の興味関心に沿ったテーマを選択し、年間を通じて学習します。

2年次はそれぞれ「班」として、保育、超ボランティア、郷土料理、地域の自然、文化・歴史などに分かれ、活動します。

高齢者のハートをゲット！ 超ボランティアの携帯電話講座

地域授業の中でもその名称から強い印象を受けるのが「超ボランティア」班です。その名の通り、「超ボランティア＝

ボランティアを超えるボランティア」。

最近行った活動の中で、特に地域の方々に好評だったのが、「携帯電話講座」です。携帯を持っていても若い人のように使いこなせない高齢者を対象に、生徒たちがマンツーマンでその使い方を教えます。

地域の方に教えていただくだけでなく、自分たちが地域で教えられることはないか…「携帯電話講座」は、生徒たちが発案。飯綱町ボランティアセンターのコーディネーターに相談しました。「そういえば、電話で話すのはできるけれど、それ以上使えない人も多い」と、ユニークな提案にコーディネーターのほう気がつかされました。ボランティアセンターでは、チラシや有線放送で宣伝したり、会場を設定したりと、彼らの活動をバックアップしました。

受講者は、孫のような高校生たちと、雑談をしながら気兼ねなく携帯電話の操作法を教えてもらい、講義はもちろんですが、それ以上に楽しい時間を過ごせたという方も多かったそうです。回を重ねるごとに、準備にもますます力が入る

ようになりました。生徒たちも、「地域の方と話せて楽しかった」「教えるのって大変」「人生の先輩からいろんなアドバイスをいただけてよかった」と、この出会いから多くのことを感じていました。

地域授業はカリキュラムに組み込まれた正課活動で、厳密にはボランティア（自発的な活動）ではないかもしれませんが。時には希望に反して「超ボランティア」班に振り分けられることもあります。「超ボランティア」班で1年間活動をした生徒の中にも、「ボランティアなんてだるい」と言う男子生徒がいました。けれども実際にやってみたら、いつの間にか誰よりも楽しく話をし、仲良くなっていたそうです。

自分たちの得意なことから発想し、コーディネーターなどの関係者に相談をしながら実際にやってみる。地域の方に喜ばれたという達成感が次の活動につながります。地域の人々の中で、自分の可能性にも出会えます。地域授業は、生徒たちに「出会い」の喜びも教えてくれます。



携帯電話講座

超ボランティア班の活動



超ボランティアでは、障がい者や高齢者の方との交流を中心に、携帯電話講座、ディサードビスでのお手伝いやフロアホッケー、スマイルボウリング、福祉体験などの活動を行いました。



「超ボランティア」班で活動した

生徒会議長 2年
青木恵里さん

生徒会長 2年
小林奏太さん

携帯電話講座に参加した生徒たちの感想

メモを取りながら聞いてくれてうれしかった。教えることの難しさを学んだ。

知らない地元の話とかも聞けて、逆にいろいろなことを教えてもらった。自分のおばあちゃんの家に行っている気分で楽しかった。

初めはボランティアなんてっていう気持ちだったけど、ボランティアにもいろいろな形があるってわかった。



地域



地域授業

リンゴ栽培、郷土料理づくり、野尻湖見学、企業見学、社会人講師・先輩講話など

つながりマップ

●北部高校「超ボランティア」班顧問 間部一男先生より

超ボランティアとは、周りから見るとボランティア活動なんだけれど、活動している本人はボランティアを意識することなく、多方面にわたって自主的に取り組むことを目的とする意味合いがあるのではないかと思います。私は着任して1年目でしたので、当初は違和感がありましたが、地域や社協の方々にお手伝いいただき、生徒と一緒に活動してとても楽しい経験をさせてもらいました。毎回初体験の活動ばかりで戸惑っていた生徒も、回を重ねるごとに次は何をするのか、楽しみにしていたようです。





福祉教育実践ガイド 2012年度版より

「いのち」の重みを受け止め いとおしむワークショップ体験

設問に対して色紙で答える旗揚げアンケート。
すぐに集計して、全体で意見交換を行います。



アイスブレイクでリラックス



先生も生徒も一緒に学びます。

大きなテーマを真剣に 楽しく考える2日間

長野清泉女学院高等学校は、県内唯一のミッションスクールで、カトリックの精神に基づいた教育を行っています。「ミッションスクールとして、生徒のいのちへの感性を育み、他者に積極的に働きかけることができる女性を育てる体験学習の場を設けたい」という先生方の願いから、毎年夏休みに、ワークショップ「いのちへのまなざしを深めるために」が開催されています。このワークショップは今年で7回目となりました。「いのち」って何？「生きている」ってどういうこと？大きなテーマを真剣に、楽しく考える2日間。「いのち」に向き合う職業（医療・看護、福祉・幼児教育など）をめざす生徒たちと先生方が参加します。

「あなたの子どもに障がいがあることがわかったとしたら」

1日目は、まずコミュニケーションを学ぶ講座。ファシリテーターの内山二郎先生による身体を使ったコミュニケーションや傾聴体験で、自分の気持ちをのびのびと表現する楽しさ、受け止めて

もらう嬉しさを体験します。

心と身体がほぐれたら、午後は「いのち」についての多様な価値観に触れる、旗揚げディスカッション。「生まれ変わったら何になりたい？」「今の自分に生まれてよかったと思うのはどんなところ？」などの問いかけに答えていきます。

この日最後の質問は、「出生前診断で、あなたの子どもに障がいがあることがわかったらどうしますか？」。この問いに対して、先生方も驚くほど様々な答えが出ました。女性は誰でも直面する可能性がある、そして社会でも大きく取り上げられている、重い難問です。胎児のいのちは誰のもの？幸せな人生って何だろう。家族ってなんだろう。そもそも、いのちって何？

ワークショップの中では、どんな意見もその場限りのものとして自由に発言することが約束ですが、短い時間の中で決断をし、意思表示をしなくてはなりません。それぞれが真剣に考えた重い決断を内山先生は丁寧に拾い上げ、「いのちって何だろう」という問いとして返します。

2日目は、ボランティア体験。市内で活動する様々なグループの方に、活動への思いを聞きました。前日の「いのち」

への問いが頭に残る生徒たちに、障がいを持って生まれた息子さんを持つお父さんが、こんなことを話してくれました。「障がいのある子は、実は親を選んで生まれてくるそうです。その言葉に出会って、私はこの子の障がいを悲しむのではなく、共に楽しく生きていこうと決めました」。参加していた生徒たちも先生方も、その言葉に圧倒されました。

教科学習では学べない 本当に大切なことを

一般に、高校生では体験学習の機会が激減します。長野清泉女学院では、出会い、体験するこのワークショップは生徒の人間性を育む大切な場だと考え、担当の先生方が丁寧に計画しています。プログラムの企画には、長野市ボランティアセンターが全面的に協力し、学校と社会をつなぐ役割を果たしています。

経済・効率重視の世の中で、本当に大切なものは何か。生きているってなんだろう。これから自分はどう生きていくか。すべての人間関係の基盤にある、「いのち」をいとおしむ心。このワークショップは、たくさんの人との出会いの中から、教科学習では学べない大切なことを学ぶ場となっています。

ワークショップ●旗揚げアンケート方式ディスカッション

「いのち」について考えよう！

設問について、自分の気持ちに一番近い色紙を1枚あげましょう

ワークのねらい

- ◎自分の考え方を整理しましょう
- ◎自分とは違う、いろいろな考え方や価値観があることを理解しましょう
- ◎ワークを通して「いのち」についてどんなことに気づいたか話し合しましょう

設問 生まれ変わるとしたら、
(抜粋) あなたは何に生まれ変わりたいですか？

- ①青 人間
- ②赤 動物、虫、魚など
- ③緑 植物
- ④黄 生き物以外
(空気、石、星など)
- ⑤白 その他



内山先生のワークは楽しく、そして時に鋭く、
生徒たちの心を開いてゆきます。

●長野市ボランティアセンター より

プログラムが長く続く間に生徒さんたちの様子も少しずつ変化して来ています。以前授業でやっていたロールプレイという形が成立しにくくなっていると感じました。ただ、それは巷で言われる「コミュニケーション力が不足している」というより、自己表現する場面が普段の生活の中で不足しているのではないかと思います。

そこで、今年は先生方と相談し、「いのち」というテーマをよりクローズアップしようと、少し重いテーマをあえて生徒さんたちにぶつけてみました。結果はご覧の通り。大人でも困惑するような問いに、生徒さんは正面から向き合ってくれました。互いの意見を受け止め、「でも、私はこう思う」としっかりと自分の意見も積極的に発言。思いを伝え合うこと、そこからあらためて「いのち」について考え合うことができたと思います。

大人になっていく女の子たちに、「いのち」について深く考える心を持ってほしい。先生方の思いが、様々な人たちと出会う楽しいワークショップになりました。夏の2日間、参加者は様々な「いのち」のありように触れ、考え、五感でそのいとおしさを受け止めています。

設問 出生前診断で、あなたの子どもに障がいがあることが
(抜粋) わかったらどうしますか？

- ①青 たとえ障がいがあっても、授かった「いのち」に変わりはないので産む
- ②赤 子どもには健全な体で育てたいので産まない
- ③緑 子どもの将来の幸せを考えると産まないほうが良いと思う
- ④黄 自分だけでは決められない。パートナーや家族と決める
- ⑤白 その他



地域で活動するみなさんの温かさが生徒たちのころを
ほころばせてくれます。

●長野清泉女学院高等学校 担当 竹村正之先生より

たった2日間の体験学習ですが、若い生徒たちには、自分を見つめなおし、人とのあり方を真剣に考える大変貴重な体験の場になっているように思います。中にはこのワークショップを機に自分の進路の方向性を定めたり、ボランティア活動を始める生徒もいますが、多くの生徒にとっては、ここでの学びを現実の場でどう生かしていくかが大きな課題となっています。今後も多くの方々のご協力を得ながら、より充実したワークショップにして行きたいと考えています。



2014年事例

＊ 善光寺ユニバーサルマップ アプリ プロジェクト



みんなで調査に出発！



福祉教育のつどいでの出会い

始まりは2012年2月、長野市ボランティアセンター主催「福祉教育のつどい」でした。NPO法人ヒューマンネットながのの川崎昭仁さんは、自身も車いすを利用する障がい者です。出会ったのは国立長野工業高等専門学校（高専）の藤澤義範先生。川崎さんは「一緒に何かできませんか？」と声をかけました。そして、ヒューマンネット理事長長島崎潔さんが継続していた「障がい者に必要なユニバーサル情報の発信」に技術を活用して“アプリ”という形にしようと活動がスタートしました。

趣旨に賛同した、障がい当事者、障がい者支援団体、福祉分野の専門家、企業の方、ボランティアが、ヒューマンネットを中心にプロジェクト方式でアプリづくりをしていくことで合意。「自分達の欲しいユニバーサルマップ」を思い描き始めました。

多様な人々とつながりあって

コーディネーターは、できるだけ多様な人々に関わってもらうことが福祉教育になると考えました。障がいのある人だけでなく、高齢者や子育て中の人たちにも必要な情報があるはずだと。

もともとボラセンと関わりの深かった子育てネットの稲村和美さんにこのプロジェクトの話をしたところ、「実は、うちの子どものクラスで中央通りの活性化について学習しているが、今ちょっと行き詰っていて……」という情報が！

「それなら」とコーディネーターはプロジェクトへの参加を提案。信州大学教育学部附属長野小学校の当時5年1組担任竹内良之先生へとつながっていききました。竹内先生はプロジェクトの経緯と目的を聞いて、調査活動を手伝いたいと申し出てくれました。

子どもたちの気付き

プロジェクトメンバーと附属小学校の子どもたち、ボランティア、県内の高校生でつくるサークルN-stationなど本当に多様な人々が関わりました。調査項目は、福祉住環境コーディネーターのアドバイスをもらい、道路や駐車場はもちろん、店舗についても間口の広さや段差、トイレの有無、人的介助があるかなど細かく調べました。調査に当たっては、商店の協力も不可欠でした。

小学生と大人と一緒に調査に行った際、「もっとちゃんと話して」と注意されたり、怒られることもありましたが、子どもたちにとっては大変ありがたかったこと

で、社会を知る機会になりましたし、お店のみなさんから「地域を大切に」することの大切さを学ぶこともできました。

さらに、この取り組みがもたらしたものの一つに、長く一緒に一つの物を作り上げた仲間として、障がいのある人たちと子どもたちの間に、良い関係と連帯感が築けたことです。川崎さんはじめ、みなさんは何度も学校を訪れました。わからないことは怖いことではなく、親しくなればなるほどその人のことを知りたくなります。

そんな関わりの中から、子どもたちは、車いすの人が自力で登れる斜度と自分たちが感じる斜度の違いを知ったり、トイレの存在がいかに大切かを知ります。そして、中央通りにはどうして誰でも使えるトイレが少ないのかといった疑問を抱き始めました。「石畳を作るお金があったら、トイレを作ればいいのに……」そんな思いも生まれました。でも、子どもたちはそれがとても難しいということも知りました。

「トイレを作してほしいと言っていたのは他人事だったのかもしれない。簡単に作れないなら、どうしたらいいのかを一緒に考え続けていくことが大切なんだと気付いた」ある子どもの発言です。

● 信州大学教育学部附属長野小学校 竹内良之先生より

「この子たちが成長して大きくなった時が楽しみだなあ」
2年間続けてきたアプリづくりの最後の調査が終わった時、近藤さんが遠くを見ながらそうつぶやいた。近藤さんは足が不自由で、杖をつきながら移動されるため、歩く速さがゆっくりである。それでもすべての調査に同行して下さった。そんな近藤さんの言葉が耳に入ってきた教師は、「それってどういうことですか」と聞き返した。すると近藤さんは語った。

「この調査をしてきた子どもたちが大人になったら、この町の未来は確実によくなるなあって思ってた。嬉しいです。そう思うと本当に嬉しいんですよ」

川崎さんをはじめとするたくさんの方々に会い、調査活動を共にした子どもたちにとって、道路の段差や斜度は、意識もなかったものから、いつも気に留まるものへと変わっていった。2年間の調査活動を振り返った孝志は、「今までやってきたのは、小さいことのかたまりだと思った」と語った。教師はそこに、微力ながらも積み上げてきた子どもたちの今を感じた。

しかし、子どもたちと一緒に調査活動をしてきた近藤さんは、今、目の前にいる子どもの姿だけではなく、子どもたちの未来を思い、その可能性を信じ、目を輝かせていた。近藤さんが子どもたちに見たものは、子どもたちの未来と、このまちの未来だった。教師は、この活動が、子どもたちの将来にもつながる学びになる可能性に気づかされた。近藤さんの生の声は、この子たちがつくる長野の未来への期待だった。



駐車場の支払機。車いすの人には使いづらい。

● NPO法人ヒューマンネットながの 川崎昭仁さんより

最初は正直な所「いまさらそれを作ることに意味があるのかな？」と半信半疑でした。でも、みなさんといっしょに作って行く過程こそ大切な場だったと痛感しています。

たくさんの思いを集めて議論した中から合意点を見出したり、調整したりするのは楽ではありません。でも、できたものを見た方から「こういうものほしかったよ」とか「良い取り組みだね」と言ってもらったことで、これは意味のあることなんだと確信しています。

完成したアプリは必ずしも完璧ではありません。これから多様な人々と関わりながら、さらにパワーアップしていきます。今後どんな人たちがここに関わってくれるのかワクワクしてきませんか？



トイレの入り口の幅は？



介助しますよ。
(旅館の人)

古い旅館には段差もあります。どうしよう？



● 国立長野工業高等専門学校 電子情報工学科 准教授 藤澤義範先生より

長野高専では、以前から福祉機器開発に関する研究に取り組んでいます。その成果を長野市の「福祉教育研究会」などで発表していました。その中でヒューマンネットながのの川崎さんと出会い、このプロジェクトが始まりました。

プロジェクトを通して、多くの方と知り合うことができました。障がいがある人もない人も共に暮らせる環境づくりと一緒にやっていきたいと心から思うようになりました。「技術は人を幸せにする」という言葉を胸に、活動を続けてきました。

小学生や高校生も参加し、障がいを持つ子どもたちと歩き、商店街の人と触れ合い、怒られもしました。いろいろな人達の思いがこめられたアプリは2015年3月7日に一般公開します。

アプリ開発に携わった学生も卒業します。そして、次の学生がこの活動へ参加します。これからもずっと「地域とともに歩み、技術で人を幸せにする」活動をしていきたいと思っています。



公開されているアプリのトップ画面
アドレス <http://unip.info/>



お話をさせてください。

障がい者支援「マイステップ」

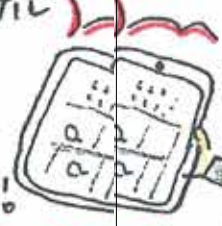


思いは同じ！

協力あり

中央通りを、良くしたい

ユニバーサル情報がつみたアプリだ！



IT企業の人



NSK 長野障がい者企画 当事者のみなさん

成竹さん



近藤さん



このまちが、つくる未来は、明るい！

カメラマンです

ビデオカメラで、車いすの目線を記録

高崎さん

30年やっています ユニバーサルマップの、ほい。

車いすのローカー！川崎さん



介助人つぼ子

NPO法人 ヒューマンネットながの

一緒に、つくるう。

高専



学生が、アプリを作りました。

技術は人を、幸にするのだ！

藤澤先生

伊藤先生

ハードで、超えられなくても、いくらでも手伝えよう

いろいろ、言葉のね。

中央通り、良くしたい！

仲間世の人



ホテルの人



トイレ、貸しこま

車いす？

いいであふ。

ぼくたちも、手伝えよう！



N-Station 高校生ボランティアサークル

ボランティア

々専門性！

福祉住環境コーディネーター

子どもたちの、頑張り、更えた！

保護者 調査にも同行

トイレ、不親切！

車いすの、おじいちゃん

斜度計

もと、調べた



小さい段差だけど、車いすでは越えられません。



イラスト：阿部今日子（長野市ボランティアセンター）

* 地域の身近な人たちとのふれあい ともに生きていくことのできる私たちに

千曲市立 埴生小学校

やまびこだより No.124 (2012年度)より



おばあさんとお話するのは楽しいなあ



更埴デイサービスセンターの皆さんとの交流



「ふるさと」をいっしょに歌って楽しかったよ

稲荷山養護学校の友だちと

埴生小学校ボランティア委員会では、更埴デイサービスセンターの皆さんとの交流を行なっています。交流会では一緒に『ふるさと』を歌うと、おじいさん・おばあさんはとても楽しそうで、私たちまで楽しい気持ちになりました。

また、牛乳パックで作った箸置をプレゼントすると、とても喜んでくださいました。他にも昔の遊びや趣味について、一つずついねいに話してくださいました。中に

は泣いているおじいさんもいて、理由を聞いてみると、私たちと話ができてうれしかったと言ってくださいました。

交流会から帰るときは、「今日はありがとうございました」と言ってくださり、私たちも心から「ありがとうございます」と言いました。

はじめは緊張していたけれど、笑顔があふれるいい交流会になりました。私は、いっしょに住んでいるうちのおばあちゃんとも、これからたくさん話をしようと思いまし

た。

また、総合的な学習の時間を使って、稲荷山養護学校の友だちとも楽しい交流をしています。このように身近な人たちとたくさんふれあい、楽しい時間を過ごしながら絆を深め、同じ地域の中でともに生きていくことのできる私たちになりたいと思います。

* 笑顔で「ニコ・ハキ・ドン」 福祉交流体験を通して学んだこと

麻績村筑北村 学校組合立 筑北中学校

やまびこだより No.129 (2013年度)より



手作りの福笑い



我が校伝統の「筑中ソーラン」も披露



また来てくれや〜



車いすのタイヤをきれいに。

筑北中学校では「ニコニコ・ハキハキ・ドンドン課題解決(通称:ニコ・ハキ・ドン)」の合言葉のもと、様々な活動を行っています。地域を知り、地域に学ぶ活動の一環として筑北タイム(総合的な学習の時間)で、1年生は地域の施設を訪問し、福祉交流体験を行っています。昨年度は「てとと麻績宅幼老所」「グループホームてととと和合」「デイサービスセンターみづき」を訪問し、交流活動を行いました。

最初の交流では、利用者さんに声をかけても振り向いてもらえなかったり、話が通じなかったりと課題が残りました。施設職員の方にアドバイスをいただき、相手の方がどのように感じてくれるかを大切に考え、交流内容を決めていきました。次の交流では、声の大きさやしぐさ、表情にも気を配ると、利用者さんの笑顔が見られ、帰る時には涙を流して握手してくださる方もいました。

この体験を通して私たちは、相手の立場で物事を考えることや、相手の考え方や生き方を大切に思う気持ちを学びました。今後も福祉交流体験を重ね、地域に生きる一人として学んでいきたいです。

* ありがとうの『和』を広げたい! 地域と笑顔でつながるボランティア

諏訪市立 諏訪西中学校

やまびこだより No.123 (2012年度)より



▲緑化委員とボランティア委員で協力して育てた花を贈りました。

▲利用者の方々の明るい笑顔で、私たちも和みます。



▲「地域をみんなで一緒に守りたい!」小学生と一緒に諏訪湖清掃。

諏訪西中学校では、「地域の方々とのつながりを大切にしたい」という願いから、介護老人保健施設「すばらしき仲間たち」やデイサービスセンター「西山の里」を訪問し交流活動を続けています。

2010年度からはさらにつながりを広げたいと考え、同じ地域に住む豊田小学校と湖南小学校の児童の皆さんに呼びかけて、一緒に諏訪湖清掃に参加したり、緑化委員とボランティア委員で育てた花を施

設に届けたりしました。施設訪問では、利用者の皆さんがいつも優しい笑顔で「ありがとう」と声をかけてくださいます。その「ありがとう」の言葉は私たちの心を温かくし、緊張していた週一回の訪問も、だんだん楽しみなものになりました。

文化祭では、施設の職員の方から「相手に感謝の気持ちを持ち、いつも笑顔でいてもらえるように心がけています。」というお話

をお聞きしました。笑顔ということの意味を考えながら、私たちもお互いが笑顔になれるような交流を続けていきたいと思うようになりました。

これからも、地域の方々和私たちが笑顔で和めるつながり、ありがとうの『和』が広がっていくようなふれあいを続けていきたいと思っています。

* SO交流で広げよう、心のつながり！ アスリートの方々とともに、スポーツで汗を流す

松本市山形村朝日村
中学校組合立 鉢盛中学校
やまびこだより No.125 (2012年度)より



バスケットボールの試合

SO (スペシャルオリンピックス) とは、知的障がいのある方にスポーツトレーニングと競技会を提供している国際的なスポーツ組織のことです。そして、SO に参加する選手をアスリートと呼んでいます。



フロアホッケーの試合



ハイタッチでお別れ

鉢盛中学校では、生徒会活動や総合的な学習の時間の一環として「SO (スペシャルオリンピックス) 交流」を行っています。交流は月に1〜2回程度、アスリートの方々に中学校の体育館に来ていただき、日曜日の午前中に行われます。中学校からは福祉交流委員とボランティア参加の生徒が毎回 30 名ほど参加し、アスリートの方々とバスケットボールやフロアホッケーに取り組み、スポーツを通して

して交流を深めています。

最初は緊張気味の生徒も、アスリートの方々が笑顔で声をかけてくれるので、パス練習や作戦タイム、試合を重ねていくうちに、自然と会話がはずむようになっていきます。まとめの会では、心の距離がぐっと近づいた現れとして車座も小さくなり、うちとけた表情で感想を伝えあい、最後は再会を願ってハイタッチでお別れします。

交流を通して生徒は、アスリートの方々のペースに合わせて活動すること、アスリートの方々に伝わるていねいな言葉づかいを意識することを学んでいきます。そして、日常の学校生活においても相手の意識に立って行動できる生徒が確実に増えているように感じます。今後もさらに、「SO 交流」の輪を全校に広げていきたいと思っています。

* 交流を深めよう 泉野っ子タイム!! 聴覚障がいがある方との6年間の交流を通して

茅野市立 泉野小学校
やまびこだより No.129 (2013年度)より



手話をつけた歌を発表



ジャガイモもち作り

泉野小学校の6年生は今年度12人。1年生の時からずっと聴覚障がいがある方との交流会を続けてきました。昨年度は、市の「人権の花の交流会」で、一緒に行った人権の花を育てる活動の様子と、音楽会でも披露した手話をつけた「翼をください」の歌も発表しました。今年度は、どんな活動をしようかと年度当初に話し合い、各学期に1回ずつ交流をすることにしました。1学期には、去

年と同じように一緒にプランターに花を植え、心温まる活動ができました。夏場にはその花がたくさん咲いて玄関を彩りました。10月の2回目の交流では、自分たちの畑で採れたジャガイモを料理することにしました。どんな料理にしたらたくさん話せるか、また安全に調理ができるかなどを

話し合い、ホットプレートで作れる「ジャガイモもち」を作ることにしました。調理中にも、手話や通訳の方を通してたくさん話ができました。最後に、PPバンドで作ったかごをプレゼントしたところ、「今度は私たちからも何かプレゼントをしたい」と言っていました。6年間の交流を続けて、手話で簡単な話ができるようになったり、どうしたらもっとなかよくなるか考えられるようになりました。

* みんな集まれ！ 元気っ子タイム 縦割りグループの活動を広げよう

信濃町立 信濃小中学校
やまびこだより No.128 (2013年度)より

信濃小中学校には、1年生から9年生 (中学3年生) が交流する縦割りグループがあり、一緒に遊んだり給食を食べたりして楽しく交流をしています。そのほかにも「元気っ子グループ」という名前の1年生から4年生だけの縦割りグループもあります。月に2回、「なかよし元気っ子タイム」を開いて、一緒に遊んだり、みんなでがんばりたいことを話し合ったりしています。今年度は「ニコニコあいさつ隊」を結成して、グループごとに選んだ場所で全校のみなさんに元気よくあいさつをする活動を

しています。同じ校舎で生活している中学生も「おはようございます」と声をかけてくれて、とてもうれしいです。6月には、「元気っ子グループ」で「ごみゼロ運動」を行いました。学校のまわりでごみ拾いや草取りをしたいところをグループごとに決めてから取り組んだので、いろいろな場所がきれいになって気持ちよかったです。これからもアイデアを出し合って、学校や地域のためにいろいろなことに取り組んでいきたいです。



中学生と交流

* 児童会活動でみんななかよしに 今年度のテーマは「協力」です

中野市立 高丘小学校
やまびこだより No.130 (2013年度)より

高丘小学校では、全校児童がなかよくなれるように児童会が中心になってテーマ「協力」に向けて活動をしています。児童会祭りでは、各委員会の活動内容を生かした保健給食委員会の「栄養バランスクイズ」、リサイクル委員会の「キャップつみ」などのアトラクションがあります。それぞれ、1年生から6年生まで全校の児童が、楽しみながら、遊びを通して自然に交流できるような活動内容になっています。各委員会の活動も盛んです。なかよし委員会の「なかよし給食」では、姉妹学



なかよし委員会の「なかよし給食」

級ごとに、一緒に給食を食べて交流しています。代表委員会の「あいさつウィーク」では、期間中、各クラスの代表委員が全員昇降口に立って、あいさつや握手で全校のみなさんを迎えたり、スタンプラリーを

しながら、楽しくあいさつに取り組めるようにしたりして、なかよしの輪を広げています。また、清掃委員会は、月に一回ずつ、クリーン登校日を設定して、友達と通学路のごみを拾いながら登校するように呼びかけています。これらの行事や活動を通して、全校のみんながなかよくなれるようにがんばっています。



清掃委員会の「クリーン登校日」

* 合言葉は「ふれあい」 広げよう！「仲良しの輪＝和」

松本市立 二子小学校
やまびこだより No.132 (2014年度)より

二子小学校では、「ふれあい」を合言葉に「仲良しの輪＝和」を広げる活動に取り組んでいます。全校縦割り班の「ふれあい活動」では、6年生のリーダーを中心に、遊びやお弁当の会食と一緒に楽しんでいます。児童会では、「つなげよう二子小の和」をテーマに、姉妹学級や縦割り班のつながりをいかながら全校が仲良くなるような集会を催しています。私たちの「仲良しの輪＝和」は、学校の外にも広がっています。クラブでは、手品や卓球・手芸などを地域の方々に教

えていただいています。児童会なかよし委員会では、近くの介護老人福祉施設へ行って交流を楽しむ活動を行っています。4年生は、和太鼓に取り組み、音楽会をはじめ、地区の文化祭や介護老人福祉施設で演奏しています。この太鼓は、10年以上前に地域の方から教えていただきました。今では学校の伝統として根づき、毎年秋に3年生が4年生から太鼓の技を引き継ぎます。私たちはこれをとても誇りに



地域講師の方とのクラブ活動

感じ、大事に受け継いでいこうと思っています。これからももっと「仲良しの輪＝和」を広げていけるようがんばっていきます。



4年生の太鼓演奏